茗溪学園中学校高等学校

Study Skills を身につけさせる教育　その 13
美術で身につける表現力（1）

教務部長　田代　淳一

Study Skills のうちの重要な Skill のひとつに表現力があります。自分が考え感じたことを様々な方法を用いて表現し伝達していく技能ですが、その中には芸術を通じて高めていくプロセスも必要です。
茗溪学園では、芸術活動を通じて表現方法を身に付け、それが芸術以外の分野にも転化していく過程を重視しています。今回は、芸術のうち特に美術科で実施している指導を紹介します。

茗溪の美術

中学校高校レベルでの美術の全国大会である全日本学生美術展で、最優秀団体賞にあたる全日本学生美術会賞を今年も受賞できました。茗溪学園中高は連続 20 年間受賞し続けています。（その世界では、実は有名な“美術系学校”であったりするのですが・・・）出品し入賞している作品には、勿論美術部員の作品もありますが、美術部員以外の授業作品もたくさんあります。ラグビー部の生徒の作品だったり、中学１年生や２年生の作品だったりもします。そのような生徒たちの中には、小学校時代は図工や絵を描くことが苦手だった、嫌いだったという生徒も少なくありません。どのようにしてこの Skill を獲得させているのでしょうか。

「見る」スキル

入学したての中学１年生に対しての最初の指導ステップは「物をよく見て、観察させる」ことです。自分が感じ取ったものを表現していくのが美術ですが、その基礎にあたるのが「見る」ことです。よく見せるためには、まず「見たい」という気持ちを起こさせることと、「見方」を教えていくことが必要です。

たとえば、１年生の美術の授業の最初の方の指導で、「今日履いてきた靴を描く」という課題があります。画用紙の上半分に、自分が今日履いてきた靴を思い出して描かせます。自分の靴は、たくさん並んだ似たような靴の中からも「あ、これ自分の」というように見分けることができます。しかし、これを思い出して描くとなると、「なんか、こんな部分があったような気がする」というレベルであって、実は全然描けないものです。それでも苦労して想像で描かせた後に、今度は実際に下駄箱に靴を取りに行かせ、実物を見て画用紙の下半分に描かせることをします。すると、今度は実に細かいところまで、それこそ縫い目のひとつひとつまで見て描けるようになる。そこまで見えるようになるのです。自分が本当に見ているという状態はどういう状態なのかをまず体験させることから始まります。

校内での絵の展示風景

「見方」の指導は、やはり１年生の「油彩で描く自画像」という課題で行います。茗溪学園では中学１年から油絵を描きますが、ここでは油絵の技法やどれだけ似ているかどうかは問題にせず、ひたすらものの見方を教えていきます。目や口や鼻を描くとき、指導を受ける前は線で表現してしまいます。実際、顔に線があるわけがなく、あるのは凹凸と明暗であり、そこに気づかせていきます。たとえば唇の描き方にしても、指導を受ける前はまるで口紅を塗ったように描いてしまいます。しかし、「上唇と下唇、どちらが明るい？」と質問し観察させると、実は鼻の下は上を向いているので明るく、上唇は下を向いているので暗く、下唇は上を向いているので明るく、その下部は下を向いているので暗く、あごは上を向いているので明るい。明暗明暗明暗の繰り返しでできていることに気が付き、初めて唇が見えてくるのです。ここに気が付けば立体的に描けるようになり、顔と髪の毛の部分もどうしても別の部分として見えていたものが、明暗の中の一体として見えるようになります。

それまで明るい暗いをまったく意識していなかった子が意識して色をつくっていけるようになり、立体的に描けるようになります。こうして初めて明暗凹凸を意識して描いた自分